

# 源氏物語

## まぼろし巻

与謝野晶子訳





源氏物語

まぼろし

紫式部

與謝野晶子訳

大空の日の光さへつくる世のやうやく

近きこちこそすれ

(晶子)

春の光を御覧になつても、六条院の暗いお気持ちちが改まるものでもないのに、表へは新年の賀を申し入れる人たちが続いて参入するのを院はお加減が悪いようにお見せになつて、御簾みすの中にばかりおいでに

なつた。兵部卿ひょうぶきやうの宮のおいでになつた時にだけはお居間のほうでお会いになろうという気持ちにおなりになつて、まず歌をお取り次がせになつた。

わが宿は花もてはやす人もなし何にか春の訪たづねきつらん

宮は涙ぐんでおしまいになつて、

香をとめて来つるかひなくおほかたの花の便たよりと言ひやなすべき

と返しを申された。紅梅の木の下を通つて対のほうへ歩いておいで

になる宮の、御風采ふうさいのなつかしいのを御覧になっても、今ではこの人以外に紅梅の美と並べてよい人も存在しなくなったのであると院は思いになった。花はほのかに開いて美しい紅を見せていた。音楽の遊びをされるのでもなく、常の新春に変わったことばかりであつた。

女房なども長く夫人に仕えた者はまだ喪服の濃い色を改めずに出て、なお醒さましがたい悲しみにおぼれていた。他の夫人たちの所へお出かけになることがなくて、院が常にこちらでばかり暮らしておいになることだけを皆慰めにしていた。これまで執心がおありになるのでもなく、時々情人らしくお扱いになった人たちに対しては独居をあそばすようになってからはかえって冷淡におなりになって、他の人たちへのごとく主従としてお親しみになるだけで、夜もだれかれと幾人

も寢室へ侍<sup>はべ</sup>らせて、御退屈さから夫人の在世中の話などをあそばしたりした。次第に恋愛から超越しておしまひになった院は、まだこうした純粋なお心になれなかった時代に、怨<sup>うら</sup>めしそうな様子がおりおり夫人に見えたことなどもお思い出しになって、なぜ戯れ事にせよ、また運命がしからしめたにせよ、そうした誘惑に自分が打ち勝ちえないで、あの人を苦しめたのであろう、聡<sup>そうめい</sup>明な人であつたから、十分の理解は持っていないながらも、あくまで怨<sup>うら</sup>みきるといふことはなくて、どの人と交渉の生じた場合にも一度ずつはどうなることかと不安におびえたふうが見えた。と院は回顧あそばされて、そうした煩悶<sup>はんもん</sup>を女王<sup>によおう</sup>にさせたことを後悔される思いが胸からあふれ出るようにお感じになるのであつた。

そのころのことを見ていた人で、今も残っている女房は少しずつ当時の夫人の様子を話し出しもした。入道の宮が六条院へ入嫁になった時には、なんら色に出すことをしなかった夫人であつたが、事に触れて見えた味気ないという気持ちの哀れであつた中にも、雪の降つた夜明けに、戸のあけられるまでを待つ間、身内も冷え切るように思われ、はげしい荒れ模様の空も自分を悲しくしたのであつたが、はいつて行くと、なごやかな気分を見せて迎えながらも、袖がひどく涙でぬれていたのを、隠そうと努めた夫人の美質などを、院は夜通し思い続けておいでになって、夢にでも十分にその姿を見ることができでろうか、どんな世にまためぐり合うことができるのであろうかとばかりあこがれておいでになった。夜明けに部屋<sup>へや</sup>へさがって行く女房なの

であろうが、

「まあずいぶん降った雪」

と縁側で言うのが聞こえた。その昔の時のままなようなお気持ちがかかるのであったが、夫人は御横にいなかった。なんという寂しいことであろうと院は思召おぼしめした。

うき世にはゆき消えなんと思ひつつ思ひのほかになほぞ程経ほどふる

こうした時を何かによって紛らわしておいでになる院は、すぐに召ちようずし寄せて手水をお使いになった。女房たちは埋うづんでおいた火を起こし出して火鉢ひばちをおそばへおあげするのであった。中納言の君や中将の君



はお居間に来てお話し相手を勤めた。

「独り寝<sup>ひとね</sup>がなんともいえないほど寂しく思われる夜だった。それでも安んじていられる自分なのに、つまらぬ関係をたくさんに作ってきたものだ」

とめいったふうに院は言っておいになった。自分までもここを捨てて行ったなら、この人たちはどんなに憂鬱<sup>ゆううつ</sup>になるだろうなどと思いいになって、居間の中がお見渡されるになるのであった。目だたぬように仏勤めをあそばして、経をお読みになる声を聞いては、ただの場合でも涙の流れるものであるのに、まして院のお悲しみに深い同情を寄せている女房たちであつたから、痛切においたましく思われた。

「この世のことではあまり不足を感じなくともよいはずの身分に生ま

れていながら、だれよりも不幸であると思わなければならぬことが絶えず周囲に起こってくる。これは自分に人生のはかなさを体験すべく仏がお計らいになるのだと思われる。それをしいて知らぬ顔にしてきたものだから、こうして命の終わりの近い時になって、最も悲しい経験をする事になったのだ。これで負って来た業も果<sup>ごう</sup>たせた気がして、安らかな境地が自分の心にできて、執着の残るものもない私だが、あなたたちと以前よりも、より親密にして数か月を暮らしてきたことで、あなたたちとの別れにもう一度心が乱れないかという不安が自分にできてきた。弱い私の心じゃないか」

とお言いになって、目をおおさえになるふうをしてお紛らしになるうとするにもかかわらず、院のお涙のこぼれるのを見る女房たちは、

ましてとめどもなく泣かれるのであった。そうしていよいよ院が見捨てておしまいになることの歎なげかわしさをだれも訴えたいのであるが、言い出しうる者もなかった。皆むせ返っていたからである。こんなふうに歎きに明かしておしまいになる朝、物思いに一日をお暮らしになった夕方などのしんみりとした時間には、愛人関係が以前あった人たちが居間に集めて語り合うのを慰めにあそばす院でおありになった。

中將の君というのはまだ小さい時から夫人に仕えてきた人であったが、院はいつとなく無関心でありえなくおなりになったか情人にしておしまいになったのを、彼女は夫人に対して自責の念に堪えないで、院の愛の手を避けるようにばかりしていたが、夫人の歿ぼつご後は愛欲を離

れて、だれよりもすぐれて故人の愛していた女房であつたとお思われ  
になることによつて、形見と見てこの人に院は愛を持つておいでに  
なつた。性質も容貌も皆よくて、喪服姿がうない松に似た可憐な女で  
ある。親しくない女房には顔もあまりお見せにならないこのごろの院  
でおありになつた。お近しくした高官たちとか、御兄弟の宮がたとか  
は始終お訪ねたずされるのであるがあまり御面会になることもない。人と  
逢あつてゐる時だけはよく自制して醜態を見せまいとしても、長く悲し  
みに浸つていてぼけた自分がどんなあやまちを客の前でしてしまふか  
もしれぬ、そうしたことがのちに語り伝えられることはいやである、  
歎き疲れて人に逢うこともできないと言われるのも、恥ずかしいこと  
は同じであるが、話だけで想像されることよりも實際人の目で見られ

たことの噂<sup>うわさ</sup>になるほうが迷惑になるとお思いになって、大将などにも御簾<sup>みす</sup>越しでしかお逢いにならなかった。こんなふう<sup>てんとう</sup>に悲歎に心が顛倒したように人が言うであろう間を静かに過ごしてから、と出家の日をお思いになって、まだ人間の中をお去りになることをされないのであった。

他の夫人たちの所へ稀<sup>まれ</sup>においでになることがあっても、そこでその人々が紫の女王でないことから新しいお悲しみが心に湧<sup>わ</sup>いて涙ばかりが流れるのをみずからお恥じになってどちらへももう出かけられることがなくなっていた。中宮<sup>ちゅうぐう</sup>は御所へお入れになったのであるが、三の宮だけは寂しさのお慰めにここへとどめてお置きになった。

「お祖母<sup>ばあ</sup>様がおっしゃったから」

とお言いになつて、宮は対の前の紅梅と桜を責任があるように見ま  
わつておいでになるのを、院は哀れに思召した。おぼしめ

二月になると、花の木が盛りなものも、まだ早いのも、梢が皆霞んで  
見える中に、女王の形見の紅梅に鶯が来てはなやかに啼くのを、院は  
縁へ出てながめておいでになつた。

植ゑて見し花の主人あるじもなき宿に知らず顔にて来居る鶯

春の空を仰いで吐息といきをおつかれになつた。

春が深くなつていくにしたがつて庭の木立ちが昔の色を皆備えてお  
胸を痛くするばかりであつたから、この世でもないほどに遠くて、鳥

の声もせぬ山奥へはいりたくばかり院はお思ひになるのであつた。山吹の咲き誇つた盛りの花も涙のような露にぬれているところばかりがお目についた。よそでは一重桜が散り、八重の盛りが過ぎて樺桜かはざくらが咲き、藤ふじはそのあとで紫を伸べるのが春の順序であるが、この庭は花の遅速を巧みに利用して、散り過ぎた梢はあとの花が隠してしまうように女王がしてあつたために、いつまでも光る春がとどまっているようなのである。若宮が、

「私の桜がとうとう咲いた。いつまでも散らしたくないな。木のまわりに几帳きちようを立てて、切れを垂たれておいたら風も寄つて来ないだろうと思う」

たいした発明をされたようにこう言っておいでになる顔のお美しさ

に院も微笑をあそばした。

「覆<sup>おお</sup>うばかりの袖<sup>そで</sup>がほしいと歌った人よりも宮の考えのほうが合理的だね」

などとお言いになって、この宮だけを相手にして院は暮らしておいでになるのであった。

「あなたと仲よくしていることも、もう長くはないのですよ。私の命はまだあっても、絶対にお逢いすることができなくなるのです」

とまた院は涙ぐんでお言いになるのを、宮は悲しくお思ひになつて、

「お祖母<sup>ばあ</sup>様のおっしゃったことと同じことをなぜおっしゃるの、不吉ですよ、お祖父<sup>じい</sup>様」



と言つて、顔を下に伏せて御自身の袖などを手で引き出したりして涙を宮はお隠しになっていた。欄干の隅すみの所へ院はおよりかかりになつて、庭をも御簾みすの中をもながめておいでになつた。女房の中にはまだ喪服を着ているのがあつた。普通の服を着ているのも、皆派手はでな色彩を避けていた。院御自身の直衣のうしも色は普通のものであるが、わざとじみな無地なのを着けておいでになるのであつた。座敷の中の装飾なども簡素になつていて目に寂しい。

今はとて荒あらしやはてん亡なき人の心とどめし春の垣根かきねを

とお歌いになる院は真心からお悲しそうであつた。

とぜん  
徒然さに院は入道の宮の御殿へおいでになった。

若宮も人に抱かれて従つておいでになつて、こちらの若宮といつしよに走りまわつてお遊びになるのであつた。花の木をおいたわりになる責任もお忘れになるくらいにおふざけになつた。

尼宮は仏前で経を讀んでおいでになつた。たいした信仰によつておはいりになつた道でもなかつたが、人生になんらの不安もお感じになるものもなくて、余裕のある御身分であるために、専心に仏勤めがおいでになり、その他のことにいつさい無関心でおいでになる御様子が見えるのを院はうらやましく思召した。こうした浅い動機で仏の御弟子でになられた方にも劣る自分であると残念に思ひになるのである。

あかだな  
関伽棚に置かれた花に夕日が照つて美しいのを御覧になつて、

「春の好きだった人の亡くなってからは、庭の花も情けなくばかり見えるのですが、こうした仏にお供えしてある花には好意が持たれますよ」

とお言いになった院は、また、

「対の前の山吹<sup>やまぶき</sup>はほかでは見られない山吹ですよ、花の房<sup>ふさ</sup>などがずいぶん大きいのですよ。品よく咲こうなどとは思っていない花と見えませんが、にぎやかな派手<sup>はで</sup>なほうではすぐれたものですね。植えた人がいない春だとも知らずに例年よりもまたきれいに咲いているのが哀れに思われます」

と仰せられた。宮はお返辞に、

「谷には春も」（光なき谷には春もよそなれば咲きてとく散るもの思<sup>も</sup>

ひもなし)

とお言いになるのであった。言うこともほかにありそうなものを自分の悲しみを嘲笑するにあたるようなことをお言いになるとはと院は心に思召しながらも、紫の女王はこうした思いやりのないことを言い出すこともすることも最後まで絶対にならない女性であつたと、少女時代からの故夫人のことを追想してごらんになると、その時はこう、あの時はこうと、才氣と貴女らしい匂いの多かつた性格、容姿、言つた言葉などばかりがお思われになつて、涙のこぼれてきたのを院はお恥じになつた。

夕方の霞が物をおぼろに見せる美しい時間であつたから、院はそこからすぐ明石夫人の住居をお訪ねになつた。久しくおいでがなかつた

のであるから突然なことに夫人は驚いたのであつたが、すぐに感じよく席を設けてお迎えするようなところに、この人のだれよりも<sup>れいり</sup>惻憫な性質は見えるものの、また故人はこうでもない高雅な上品さがあつたと思ひ比べられては、その幻ばかりが追われるようになつて、悲しみがさらにまさつてくるのを、院は御自身ながらどうすれば慰む心であらうと苦しく思召した。こちらでは落ち着いて昔の話などを院はしておいでになつた。

「人をあまりに愛することは結果のよくないものだ、私は昔から知っていたし、またそのほかのことにも執着心がこの世に残らぬようにと心がけていて、一時逆境に置かれたころなどは、いろいろな理想もこの世に持ったと言つても、それは実現性のないことにきめて、ど

んな野山の果てで自分の命を果たしてしまっても惜しいものもないとだけは思えたものだが、年がいつて死期が近づくころになって、いろいろな係累をふやすことになったために、今まで出家も遂げることができないでいるのが自分で齒がゆくてならない」

などと院はお言いになって、夫人と死別したばかりの悲しみでないように言っておいでになるが、明石の心には院の御内心は何によって苦しんでおいでになるかはよくわかっていて、道理なことであるとおいたわしく思った。

「他人から見まして、この世に未練の残るわけもないような人も、その人自身には捨てられない絆ほどしが幾つもあるものなのでございますから、ましてあなた様などがどうしてそう楽々と遁世とんせいの道をおとりにな

ることがおできになれましょう。深い考えもなく出家をいたす者はあ  
とで見苦しいことも起こして、かえってそうならねばよかったように  
世間から申されることもあるものでございますから、道におはいりに  
なりますことをお急ぎにならずにおいでになりますのが、あとでこ  
りっぱな悟りをお得<sup>え</sup>になる過程になるかと存ぜられます。昔の例を承  
りまして、突然心の傷つけられますような悲しみにあいますとか、  
大きな失望をいたしましたとか申すような時に厭<sup>えん</sup>世的<sup>せい</sup>になつて出家を  
いたすと申すことはあまりほめられないことになっているではござい  
ませんか。もうしばらく御<sup>ほ</sup>発<sup>っ</sup>心<sup>しん</sup>をお延ばしになりました、宮様がたも  
大人におなりになり御不安なことなどはいつさいないころまで、この  
ままで御家族に動揺をお与えあそばさないようにしていただけました

らうれしかろうと存じます」

などとまじめに言っている明石に院は好感をお持ちになることができた。

「そんなになるまで待っていることが思慮深いのだったら、それよりもあさはかなほうがましなようだね」

などとお言いになって、昔から悲しいことに多くあつておいでになった話もあそばされた。

「昔、中宮がお崩れかくになった春には、桜が咲いたのを見ても、『野べの桜し心あらば』（深草の野べの桜し心あらば今年ばかりは墨染めに咲け）と思われたものですよ。それはごりっぱな方であることが小さいころから心にしみ込んでいたために、お崩れになった時にも私がだ



れよりもすぐれて悲しかったのです。恋愛の深さ浅さと故人を惜しむ情とは別なものだと思う。長く同棲どうせいした妻に別れて、病的にまで悲しんで、その人が忘れられないのも恋愛の点ばかりでそうなのではありませんよ。少女時代から自分が育ててきた人といつしよに年をとってしまった今になって、一人だけが残されて一方が亡なくなってしまうたということが、みずから憐あわれまれもし、故人を悲しまれもして、その時あの時と、あの人の感情の美しさの現われた時とかあの人の芸術とか複雑にいろいろなことが思わせられるために、深い哀愁に落ちていくのです」

などと、夜がふけるまで、昔をも今をも話しておいになつて、このまま明石夫人のところで泊まっていってもよい夜であるがとはお思

いになりながら院のお帰りになるのを見て、明石夫人は一抹いちまつの物足りなさを感じたに違いない。院も御自身のことではあるが、怪しく變わってしまった心であるとお思いになった。

お帰りになるとまた仏勤めをあそばして夜中ごろに昼のお居間でかり臥ふしのようにしてお寝やすみになった。

翌朝早く院は明石夫人へ手紙をお書きになった。あかし

泣く泣くも帰りにしかる飯の世はいづくもつひのとこよならぬに

という歌であつた。昨夜ゆうべの院のお仕打ちは恨めしかつたのであるが、こんなふうには別人であるように悲しみに疲れておいでになる御様

子を思つては自身のことはさしおいて明石は涙ぐまれるのであつた。

かりがぬし苗代水の絶えしよりうつりし花の影をだに見ず

いつも変わらぬ明石の返歌の美しい字を御覧になつても、この人を  
無礼なちんにゆうしや闖入者のように初めは思っていた女王が、近年になつて互いに  
友情を持ち合うようになり、自尊心を傷つけない程度の交わりをして  
いたのであるが、明石はそれとも気がつかなかつたであらうなどとも  
院は来し方のことを思つておいでになつた。お寂しくてならぬ時にだ  
けは明石夫人のその場合のような簡単な訪問を夫人たちの所へあそば  
される院でおありになつた。さいしやう妻妾と夜を共にあそばすようなことはど

こでもないのである。

夏の更衣ころもがえ はなちるさとに花散里夫人からお召し物が奉られた。

夏ごろもたちかへてける今日ばかり古き思ひもすすみやはする

この歌が添えられてあつた。お返事、

羽衣のうすきにかはる今日よりは空蟬うつせみの世ぞいとど悲しき

賀茂祭かもりの日につれづれで、

「今日は祭りの行列を見に出ようと思って世間ではだれも興奮をして

いるだろう」

こんなことをお言いになつて、賀茂の社前の光景を目に描いておいでになつた。

「女房たちは皆寂しいだろう、実家のほうへ行つて、そこから見物に出ればいい」

などとも言つておいでになつた。中將の君が東の座敷でうたた寝しているそばへ院が寄つてお行きになると、美しい小柄な中將の君は起き上がった。赤くなつてゐる顔を恥じて隠しているが、少し癖づいてふくれた髪の前に見えるのがはなやかに見えた。紅の黄がちな色の袴はかまをはき、単衣ひとえも萱草色かんぞうを着て、濃い鈍色にびに黒を重ねた喪服に、裳もや唐から衣ぎぬも脱いでいたのを、中將はにわかにな上へ引き掛けたりしていた。葵あおい

の横に置かれてあつたのを院は手にお取りになつて、

「何という草だったかね。名も忘れてしまったよ」

とお言いになると、

さもこそは寄るべの水に水草みぐさぬめ今日のかざしよ名さへ忘るる

と恥じらいながら中将は言った。そうであつたと哀れに思いになつて、

おほかたは思ひ捨ててし世なれどもあふひはなほやつみおかすべ  
き

こんなこともお言いになり、なおこの人にだけは聖の心持ちにもなれず、行為もお見せになることはおできにならないのであった。

五月雨の薄暗い世界の中では物思いを続けておいでになるばかりの院は、寂しかったが十幾日かの月がふと雲間から現われた珍しい夜に大將が御前に来ていた。花橘の木が月の光のもとにあざやかに立つて薫りも風に付いておりおりはいつてきた。「千世をならせる」というこれと深い関係の杜鵑が啼けばよいと待っているうちに、にわか雲が湧き出してきて、はげしく雨の降るのに添って吹き出した風のために、燈籠の灯も消えそうになって、空の暗さが深く思われる時に「蕭蕭暗雨打窓声」などと、珍しい詩ではないが院のお歌いになる美声をお聞きすると、恋を解する女に聞かしむべきものであると惜しまれ

た。

「独身生活というものは、私一人が経験しているものでもないが、怪しいほど寂しいものだ。山へはいつてしまいう前にこうして習慣をつけておくことは非常によいことだと思う」

などと院はお言いになって、

「女房たち、ここへ菓子でも出すがよい。男たちに命じるほどのことでもないから」

などとも気をつけておいでになった。夕霧は空をおながめになる院の寂しい御表情を見ていて、こんなふうについてまでもいつまでも故人を悲しんでおいでになつては、出家をされても透徹した信仰におはいりになることはむずかしくはないかと思つていた。ほのかな隙見すきみをし



ただけの面影すら忘れないのであるからまして院が女王のためのお悲しみの深さは道理至極であると言わねばならぬと同情も申しיתה。

「昨日か今日のことにように思っておりますうちに御一周忌にももう近づいてまいります。御法事はどんなふうにあそばすおつもりでございますか」

と大将が言うと、

「何も普通と違ったことをしようと思っていない。女王が作らせたままになっている極楽の曼陀羅まんだらをその節に供養すればいいことと思う。書いておいた経もたくさんあるはずなのだが、某僧都は故人からどうするかをよく聞いてあるようだから、それに加えてすることも皆僧都

の意見によることにしようと思う」

と院は仰せられた。

「御自身の御法要についてのことまでもお仕度<sup>したく</sup>をあそばしておかれましたことは、お考え深いことでしたが、お二方の上で申しますと、この世での御縁は短かったのですから、せめて形見になる人をお残しくだすつたらと存じますと残念でございます」

「しかし子は早く死なずに現存している妻のほうにも少なかつたのだからね。私自身が子は少なくしか持てない宿命だったのだろう。あなたによって子孫を広げてもらえばいい」

などと院はお言いになるのであつて、何につけても忍びがたい悲しみの外へ誘い出されることをお恐れになり、故人のこともあまりお話

しにならぬうちに、「いにしへのこと語らへば時鳥いかに知りてか古ふる声こゑに啼なく」と言いたいような杜鵑ほととぎすが啼いた。待たれていた声なのであるが、

亡なき人を忍よひぶる宵の村雨むらさめに濡ぬれてや来つる山ほととぎす

前よりもいっそう悲しいまなざしで空を院はおながめになった。夕霧は、

郭公ほととぎす君につてなん古さとの花橘たちばなは今盛りぞと

と歌った。この時に女房たちもそれぞれ歌を詠よんだのであるがここには省いておく。

大将はそのまま宿直とのいすることにした。御独居生活の心苦しさに時々夕霧はこうしておそばで泊まってゆくのであるが、紫の女王のいたころにはたやすく近い所へも寄ることを院はお許しにならなかった帳台のかたわらに寝ることによつても、大将は昔が今にならぬことを悲しんだ。

暑いころに涼しい水亭すいていに出て院がながめておいでになる池には、蓮はすの花が盛りに咲いていた。恋しい人への追懷のためにこの花の前にもうつろな気持ち覚えておいでになるうちに、日も暮れに近くなつた。はなやかに蝸ひぐらしの鳴く声を聞きながら、撫子なでしこが夕映ゆうばえの空の美しい

光を受けている庭もただ一人見ておいでになることは味気ないことでおありになった。

つれづれとわが泣き暮らす夏の日をかごとがましき虫の声かな

蛩ほたるが多く飛びかうのにも、「夕せきでん殿に蛩飛んで思ひ悄然せうぜん」などと、お口くちに上る詩も楊妃ようひに別れた玄宗の悲しみをいうものであった。

夜を知る蛩を見ても悲しきは時ぞともなき思ひなりけり

七月七日も例年にな変わった七夕たなばたで、音楽の遊びも行なわれずに、寂

しい退屈さをただお感じになる日になった。星合いの空をながめに出る女房もなかった。

未明に一人臥<sup>ふ</sup>しの床をお離れになつて妻戸をお押しあけになると、前庭の草木の露の一面に光っているのが、渡<sup>わた</sup>殿<sup>どの</sup>のほうの入り口越しに見えた。縁の外へお出になつて、

七夕の逢<sup>あ</sup>ふ瀬は雲のよそに見て別れの庭の露ぞ置き添ふ

こう口ずさんでおいでになつた。

秋風らしい風の吹き始めるころからは法事の仕<sup>した</sup>度<sup>たく</sup>のために、院のお悲しみも少し紛れていた。あれから一年たったかとお思<sup>ぼ</sup>い<sup>う</sup>になると呆

然<sup>ぜん</sup>ともおなりになるのである。命日である十四日には上から下まで六条院の中の人々は精進潔斎して、曼陀羅<sup>まんだら</sup>の供養に列するのであった。例の宵<sup>よい</sup>の仏前のお勤めのために手水<sup>ちようず</sup>を差し上げる役にあたった中將の君の扇に、

君恋ふる涙ははてもなきものを今日をば何のはてといふらん

と書かれてあったのを、手に取ってお読みになつてから、院がまたその横へ、

人恋ふるわが身も末になりゆけど残り多かる涙なりけり

とお書き添えになった。

九月になり被<sup>きせ</sup>綿<sup>わた</sup>をした菊を御覧になって、

もろともにおきぬし菊の朝露もひとり袂<sup>たもと</sup>にかかる秋かな

と院はお歌いになった。

十月は時雨<sup>しぐれ</sup>がちな季節であつたからいつそう院のお心はお寂しそうで、夕方の空の色など言いようもなく心細く御覧になるのであつて、「いつも時雨は降りしかど」（かく袖<sup>そで</sup>ひづるをりはなかりき）など口ずさんでおいでになった。空を渡る雁<sup>かり</sup>が翼を並べて行くのもうらやましくお見守られになるのである。



大空を通ふまぼろし夢にだに見えこぬ魂たまの行く方へ尋ねよ

何によつても慰められぬ月日がたつていくにしたがい、院のお悲しみは深くばかりになった。

五節ごせちなどといって、世の中がはなやかに明るくなるころ、大将の子息たちが殿上勤めにはじめて出たといつて、六条院へ来た。二人とも非常に美しい。母方の叔父おじである頭中とうちゅう将や蔵人少将くらうじょうなどが青摺あおずりの小おみ忌衣ごろものきれいな姿で少年たちに付き添つて来たのである。朗らかなふうのこうした若い人たちを御覧になる院は、御自身の青春の日もお振り返られになつて昔のこの日の舞い姫に心をお惹ひかれになつたことなどもさすがになつかしいこととお思ひ出しになった。

宮人は豊とよの明りにいそぐ今日けふ日かげも知らで暮らしつるかな

今年をこんなふうに隠忍してお通しになった院は、もう次の春になれば出家を実現させてよいわけであるとその用意を少しずつ始めようとされるのであったが、物哀れなお気持ちばかりがされた。院内の人々にもそれぞれ等差をつけて物を与えておいでになるのであった。目だつほどに今日までの御生活に区切りをつけるようなことにはしてお見せにならないのであるが、近くお仕えする人たちには、院が出家の実行を期しておいでになることがうかがえて、今年の終わってしまうことを非常に心細くだれも思った。人の目については不都合であるとお思いになった古い恋愛関係の手紙類をなお破るのは惜しい気がある

そばされたのか、だれのも少しずつ残してお置きになったのを、何かの時にお見つけになり破らせなどして、また改めて始末をしにおかかりになったのであるが、須磨すまの幽居時代に方々から送られた手紙などもあるうちに、紫の女王にようおうのだけは別に一束になっていた。御自身がしてお置きになったのであるが、古い昔のことであつたと前の世のことのようにお思われになりながらも、中をあけてお読みになると、今書かれたもののように、夫人の墨の跡が生き生きとしていた。これは永久に形見として見るによいものであると思召おぼしめされたが、こんなものも見てならぬ身の上になろうとするのでないかと、気がおつきになつて、親しい女房二、三人をお招きになつて、居間の中でお破らせになつた。こんな場合でなくても、亡なくなつた人の手紙を目に見ること

は悲しいものであるのに、いっさいの感情を滅却させねばならぬ世界へ踏み入ろうとあそばす前の院のお心に女王の文字がどれほどはげしい悲しみをもたらしたかは御想像申し上げられることである。御気分はくらくなって涙は昔の墨の跡に添って流れるのが、女房たちの手前もきまり悪く恥ずかしくおなりになって、古手紙を少し前方へ押しやって、

死出の山越えにし人を慕ふとて跡を見つつもなほまどふかな

と仰せられた。女房たちも御遠慮がされてくわしく読むことはできないのであったが、端々の文字の少しずつわかっていくだけさえも非

常に悲しかった。同じ世にいて、近い所に別れ別れになっている悲しみを、実感のままに書かれてある故人の文章が、その当時以上に今のお心を打つのは道理なことである。こんなにめめしく悲しんで自分は見苦しいとお思ひになつて、よくもお読みにならないで長く書かれた女王の手紙の横に、

かきつめて見るもかひなし藻塩草もしほぐさ同じ雲井の煙とをなれ

とお書きになつて、それも皆焼かせておしまいになつた。

仏名の僧を迎える行事も今年きりのことであるとお思ひになると、僧しやくじようの錫杖の音も身に沁しんでお聞かれになつた。院のために行く末長く

寿命の保たれることを僧たちの祈り唱えるのも、院のお心には仏へ恥  
ずかしく思われになった。雪が大降りになって厚く積もった。帰ろ  
うとする導師を院は御前へお呼びになって、杯を賜わったりすること  
なども普通の仏名式の日以上の手厚いおねぎらいであった。纏頭<sup>てんとう</sup>など  
も賜わった。長くこの院へお出入りし、御所の御用も勤めているお馴<sup>な</sup>  
染<sup>じ</sup>み深い僧が、頭の色もようやく変わって老法師になった姿も院には  
哀れに思われになるのであった。この日も例の宮がた、高官たちが  
多数に参入した。梅の花の少し花らしく顔を上げ出したのが、雪の中  
にきわだって美しく見える日であったから、音楽の遊びもあつてしか  
るべきなのであるが、本年中はなお管絃<sup>かんげん</sup>もむせび泣きの声をたてるも  
ののように思召されるお心から、そのことはなくて、詩歌を歌わせて

お聞きになるくらいのことでとどめられた。導師へ院が杯をおさしになった時のお歌は、

春までの命も知らず雪のうちに色づく梅を今日かざしてん

というのであって、お返し、

千代の春見るべきものと祈りおきてわが身ぞ雪とともにふりぬる

参会者の作も多かったが省いておく。院の御美貌は昔の光源氏でおありになった時よりもさらに光彩が添ってお見えになるのを仰いで、

この老いた僧はとめどなく涙を流した。

今年が終わることを心細く思召す院であつたから、若宮が、

「儼<sup>なや</sup>追いをするのに、何を投げさせたらいちばん高い音がするだろう」

などと言つて、お走り歩きになるのを御覧になつても、このかわい  
い人も見られぬ生活にはいるのであるとお思ひになるのがお寂しかつ  
た。

物思<sup>も</sup>ふと過ぐる月日も知らぬまに年もわが世も今日や尽きぬる

元日の参賀の客のためにことにはなやかな仕度<sup>したく</sup>を院はさせておいで



になった。親王がた、大臣たちへのお贈り物、それ以下の人たちへの纏頭てんとうの品などもきわめてりっぱなものを用意させておいでになった。

### 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---